

孔子集団について

高橋 均

On the Confucian Group

Hitoshi TAKAHASHI

まえがき

孔子を中心として組織された集団が¹⁾、どのような歴史的状況のなかに成立したのか、そして、その集団はどのように構成され、歴史的にどのような役割りを果たしたのか、ということについて、孔子の弟子たちの活動を通して考えてみようというのが、小論のねらいである。先秦の諸家が、個人としてよりも、集団として活動している事実注目するならば、孔子という歴史的人間をとらえる場合においても、集団としての外廓をまずとらえることが、必要であるように思われる。これらのことが少しでも明らかになることによって、やがては集団の中心にいた孔子の歴史的な位置づけも可能になるのではなからうか。

1-1

比較的はやく、孔子の中国歴史上における位置について注目すべき発言を行なったのは、馮友蘭であった。かれは、〈孔子在中国歴史中之地位〉(《燕京学報》第二期・1927年北京)において、大要つぎのようにのべる。

- 六芸を教えたのは孔子に始まるのではないが、六芸を一般の人に教えたのは、孔子に始まる。
- 孔子は、中国で最初に学術を民衆化し、教育を職業とした“教授老儒”であり、かれによって、戦国の講学・遊説の風が開かれた。そして、非農・非勞・非商・非官僚である士の階級を作り出した。
- 孔子以前の士とは、大夫士の士、あるいは軍士の士である。孔子により創出された新しい階級である士は、生産には従事せず、人に養われる立場にあった。
- 士階級の創始者である孔子は、中国歴代の政治権力が士の手中にあったため、先師先聖の地位を容易に獲得することができた。

馮友蘭のこの指摘は、孔子が歴史上に果たした役割りを、みごとに摘出してくれたといえる。しかし、孔子の歴史上の地位を追求することに急だったためか、その役割りを過大視しているきらいがないでもない。たとえば、‘非農・非勞・非商・非官僚である士の階級を作り出した’というみかたについてである。孔子とその弟子たちは、従来なかった新しい階層を構成したのかもしれないが、このことから、この階層は孔子によって作り出された、ということがいえるのかどうなのかということになると疑問である。むしろ、馮友蘭のいう孔子が創出したという士の階級は、孔子自身まで

もそこに含まれているような、そういう新しい階層として春秋中期から生まれつつあった、とみるほうが自然なのではなからうか。

この春秋中期より新しく生まれてきた士階層について、孔子集団との関係を、社会経済史的立場から論じたのは、宇都宮清吉氏の〈孔子学団〉(《東方学報》創立二十五周年記念論文集・昭和30年京都)である。

それによると、春秋中期以後、鉄製農具の出現はそれまでの大血族团的家族の協働によってはじめて維持することが可能であった農耕を、容易にその協働から解放し、行動の自由をうることを可能にした。このことは、貴族共同体の解体をうながし、その結果、貴族共同体から解放された族員は、新国家体制の俸禄的官僚となるとともに、一方では没落する分子ともなる。かくて、貴族と農民社会の解体によって生まれてくる新しい民なるものが、一方は身分的降下のかたちで、一方は向上のかたちでひとつに混交することによって形成される。孔子の学団に入ってくるもの、つまり孔子の弟子たちは、まさにこの種の人びとであったらう。しかし、すべての人が学団に参加しえたのではない、一応自活しうる経済的能力をもつ人にも限定され、それ以外の人は小人として拒ぞけられた、ここに孔子の歴史的限界があった。

ほぼ以上のようにまとめることができよう。この宇都宮氏の指摘は、孔子の集団というものを考えるうえで、大きな示唆を与えてくれるように思われる。とりわけ、馮友蘭が孔子の功績に帰した士階級の創出ということ、社会経済史的立場からより深めたものとしてみるができる。孔子はけっして士の階級を創出したのではない、春秋中期からの社会変化のなかにその階層は生まれつつあったのである、そしてその階層のなかからある目的を持った集団が形成されはじめた、これがつまり孔子集団なのであろう。そうであるならば、集団には集団を成立させる事由があるはずであり、また集団として当時の社会とのかかわりあいのなかで、集団独自の機能を有していたはずである。それはどのようなことであるのか²⁾。

集団に参加することは、官僚として役立ちうる資格と能力とを獲得し、将来官僚として政治に参加するためであった。孔子集団では、そういう人びとは、君子あるいは士と呼ばれていたようである。孔子集団は、この君子あるいは士を育てるところであった。そのためには、集団に参加した人に君子あるいは士であるための自覚が要求され、その自覚のもとに行動することが要求された。孔子集団とは、このような人びとの集まりであったらしい³⁾。以上のことは、孔子自身、あるいはかれの弟子の事跡から知られることである。

ところが、孔子集団のなかにおいて、官僚となりうる能力をもちながら、官僚として出仕することを拒否した人もいる。孔子集団に参加した人びとにとって、官僚として出仕するとはどういうことなのか、ということが検討されなければならなくなってくる。

《論語》のなかには、士についてふれる個所は非常に多い。今、その結論だけを記すと、士とは仕える、ということの意味している場合が多い。たとえば、つぎのようにいわれる。

子貢問曰、何如斯可謂之士矣。子曰、行己有恥、使四方、不辱君命、可謂士矣。(《論語・

子路》)

また、ことばの関係からみても、士が仕えるということと密接に関連していることは、これまでにすでに多くの人によって指摘されていることである⁴⁾。この仕えることが士のひとつの側面であるならば、もうひとつの側面として、‘道に志ざす’ということがあげられるであろう。《論語》のなかの孔子のことばとして、

士志於道，而恥惡衣惡食者，未足與議也。《論語・里仁》)

とあることがそれを示す。そして、‘道に志ざす’ことは仕えるときの前提であるようだから、その政治に参加する態度は、絶対につきのようであってはならない。

子曰、鄙夫，可與事君也與哉。其未得之也，患得之。既得之，患失之，苟患失之，無所不至矣。《論語・陽貨》)

孔子の称賛したあるべき士とは、つぎのような人であった。

子曰、直哉史魚，邦有道，如矢。邦無道，如矢。君子哉蘧伯玉，邦有道，則仕，邦無道，則可卷而懷之。《論語・衛靈公》)

また曾子のいう

士不可以不弘毅，任重而道遠。仁以為己任，不亦重乎。死而後已，不亦遠乎。《論語・泰伯》)

ということばは、はじめから集團に士の自覚として示されたことばとは思えないが、上述のことから当然みちびき出されることである。孔子集團において求められる士とは、このような能力と資格とを有する人のことであった。そのために、集團においてさまざまな教育が行なわれたのであるが、ここではそれには触れない。これからのべようと思うのは、孔子集團に参加した人びとが、どのように現実の政治とかかわりをもったか、子夏のことばを借りるならば、“学而優則仕”《論語・子張》とはどのようなことであったかということである。

1-2

孔子が弟子たちとともに、ある主張をもって行動していたことは、すでに《孟子・梁惠王上》に“仲尼之徒”という表現があることから知られる。その“仲尼之徒”について、同じく《孟子・公孫丑上》に“七十子”とあるから、七十人くらいの集團であったことがわかるのである。しかし、それが《史記》になると、

受業身通者，七十有七人，皆異能之士也。《仲尼弟子列伝》)

あるいは、

弟子蓋三千焉，身通六藝者七十有二人。《孔子世家》)

などとあって、七十二人あるいは七十七人とは、六芸に通じた異能の士の数であって、弟子の総数は三千人だった、ということである。この弟子の数が七十二人であるのか七十七人であるのか、あるいは七十人であるのか、また集團の総数が三千人であるといわれるのが実数であるのか、などと

いうことについて、今たしかめる方法はないし、また決めなければならぬことでもない。今はただ孔子集団に参加したのは七十人くらいであった、という諸書の記録を認めるしかないわけである。周知のように、〈仲尼弟子列伝〉には、七十七人の名前が示されているが、そのなかで事跡の明らかなのは、29人にしかすぎない⁵⁾。

この29人のなかに、顔回などのように陋巷に居ることに甘んじ、貧窮生活をいとんでいたと思われる数人の弟子がいる。かれらも、仕えることが貧しい生活から脱け出ることのできる方法であることに気づいていたにちがいない。孟子に、つぎのようなことばがある。

孟子曰、仕非為貧也、而有時乎為貧。娶妻非為養也、而有時乎為養也。為貧者、辭尊居卑、辭富居貧。(《孟子・万章下》)

あるいはこれは、孟子の当時の状況であるのかもしれない。そして、すくなくともその当時には、仕えることによってほぼ確実に、尊位と富とがえられるような事実があったらしい。

孔子の弟子たちについていうと、たとえば原憲についてのつぎの記事

原思為之宰。與之粟九百，辭。(《論語・雍也》)

孔子卒。原憲遂亡在草沢中。子貢相衛，而結駟連騎，排藜藿入窮閭，過謝原憲。憲撰敝衣冠見子貢。子貢恥之曰，……(《仲尼弟子列伝》)

閔子騫についてのつぎの記事

季氏使閔子騫為費宰。閔子騫曰，善為我辭焉，如有復我者，則吾必在汶上矣。(《論語・雍也》)

不仕大夫，不食汙君之祿。如有復我者，必在汶上矣。(《仲尼弟子列伝》)

漆雕開についての

子使漆雕開仕。対曰，吾斯之未能信。子説。(《論語・公冶長》)

公皙哀についての

孔子曰，天下無行，多為家臣仕於都。唯季次未嘗仕。(《仲尼弟子列伝》)

これらの記事は、仕えることによって尊位と富とを得ることを拒否した人が、孔子の集団のなかにもいたことを示している⁶⁾。さきに示した士の定義からすれば、孔子集団のなかにかうした人びとが存在することは、当然といえるかもしれない。道に志ざすことと仕えることが矛盾した時、かれらは道に志ざすことをえらんだ。これら仕えることを拒否した人びとのなかで、顔回には、つぎのような話しさえ生まれている。

孔子謂顔回曰，家貧居卑，胡不仕乎。顔回対曰，不願仕。回有郭外之田五十畝，足以給飡粥，郭内之田十畝，足以為絲麻。鼓琴足以自娛，所学夫子之道者，足以自樂也。回不願仕。(《莊子・讓王》)

もちろん、この話しがどれだけ事実を伝えているのかということには問題があり、この話しを伝えた人による脚色がなされていることも十分予想されることである。とりわけ、仕えることを拒否する理由として、“所学夫子之道者，足以自樂也”とのべていることは、道に志ざすゆえに、あるいは

“汙君”であるがゆえに仕えることを拒否した場合とは異なっており、孔子集團のなかに、このような立場をとる人が存在したのかどうかということは、疑問として残るのである。

以上のべてきた、顔回、原憲、閔子騫、漆雕開、公皙哀などは、前述した分けかたにしたがうならば、道に志ざすという側面を重視した人びとであり、孔子集團の性格を考えるうえで興味ある記事ではあるが、ここではこれ以上は論じない⁷⁾。

1-3

それでは、出仕した弟子についてはどのような状況があったのであろうか。いうならば、‘仕える’という側面を重視した弟子たちである。以下、概観してみよう。

[魯に仕えた弟子]

子貢について

〈仲尼弟子列伝〉によると、“相魯”とあって、その地位にふさわしい活躍のかずかずが記されている。それによると、齊の田常が魯を討とうとして魯に危険が迫った時、孔子の門弟子である子貢は、孔子の指示によって、まず齊に行き、戦いの不合理であることを説き、ついで呉に行き……という具合に、まるでのちの戦国の遊説家のような役割りを果たし、田常の計画を中止させる。その結果を司馬遷は、

故子貢一出，存魯乱齊，破吳彊晉，而霸越。子貢一使，使勢相破，十年之中，五国各有變。(〈仲尼弟子列伝〉)

とのべる。〈仲尼弟子列伝〉にのべられる子貢の伝が、事実と合致しないことについては、先人にすでに考証があり⁸⁾、また子貢にこのような伝が作られた過程については、私もすでに論じたことがある⁹⁾ので、ここでは省略する。

しかし、《左伝》の哀公七年、十二年、十五年¹⁰⁾などの記事によると、子貢は魯において政治の中樞にいたことが知られる。ただ、《左伝》のこの記事に應ずるようなことは、《論語》にはまったく見ることができない、わずかに〈雍也〉篇に、季康子と孔子の間答として、子貢に政治を担当できる能力があるかどうかたずねた

(季康子)曰、賜也可使從政也與。(孔子)曰、賜也達、於從政乎何有。

とあることが知られるにすぎない。

子游について

《論語》の〈雍也〉〈陽貨〉によると、武城宰となったらしい。また、《論語》の記事をうけた〈仲尼弟子列伝〉にもそのことは記されているが¹¹⁾、時期的にははっきりしない。武城は魯の公邑である。

澹台滅明について

子游が武城宰になった時、子游によって登用されたことが《論語》の〈雍也〉篇に見えている。しかし、〈弟子伝〉はそのことにはふれず、出仕せず、行いを修め、弟子三百人を集め、名声が諸侯に広まったと記されている¹²⁾にすぎない。

子夏について

《論語・子路》篇に、莒父宰となった時、孔子とかわした問答が記されている¹³⁾。しかし、《左伝》および《弟子伝》には、このことについての記述はない。莒父は魯の公邑である。

子賤について

《弟子伝》によると単父宰となったとある。顧棟高によると、単父とは魯の地名であるらしい。ところで、子賤が単父の宰となったことは、《弟子伝》だけに見えることで、《論語》《左伝》などには見えない。歴史的事実として疑はしい。《弟子伝》のこの記事は、子賤が無為にして単父を治めたということが《呂氏春秋》などに見えているから¹⁴⁾、それによったのであろう。

原憲について

《論語・雍也》篇に宰となったとあり、《集解》および皇侃の《義疏》によると、それは孔子が魯の司寇となった時、孔子の邑の邑宰となったのであるという¹⁵⁾。

〔季氏に仕えた弟子〕

子路について

《左伝》、《仲尼弟子列伝》によると、季氏宰になったとある。そのことは、《論語》には直接記されていないが、《論語》の《雍也》、《先進》の各篇に、季氏とある種の関係があったことにふれている¹⁶⁾。季氏宰となったのは、《左伝》によると定公十二年のことで、この時、孔子は魯の大司寇の地位にあった¹⁷⁾といわれる。

子羔について

《論語・先進》篇によると、子路が子羔を費宰にしたという。費は季氏の私邑である。ところが、この記事を受ける《仲尼弟子列伝》では、費邸宰になったとある。邸は三桓のひとり叔孫氏の私邑であるから、費邸宰とすることには誤りがある。《史記正義》が邸についてのみ注していることから、《史記》については費を衍文とする説が有力のようであるが、《論語》および日本に伝わる《史記》のテキスト¹⁸⁾によると費宰となる。

冉求について

《論語》の《先進》《季氏》、《孟子・離婁》、《左伝》哀公十一年、《仲尼弟子列伝》などによると¹⁹⁾、季氏宰であつたらしい。季氏宰になった時期については、

康子曰、則誰召而可。曰、必召冉求。於是使使召冉求。冉求将行。孔子曰、魯人召求、非小用之、将大用之也。(《孔子世家》)

とあるから、この時季氏に仕えたとすればそれは哀公三年のことになる。そして、《孔子世家》で哀公八年の項に

冉有為季氏将師、與齊戰於郎、克之。

とあるから、この時にはすでに季氏宰であつたように思われる。《左伝》の哀公十一年、十四年、二十三年には、季氏の家における冉有の役割りがそれぞれ記されている。

仲弓について

《論語・子路》篇に、季氏宰になったとある。しかし、《左伝》、《弟子列伝》ともにそのことを記していない。皇侃の《義疏》によると、季氏の采邑である費の大宰となったのであるという²⁰⁾。《子路》篇の文意からは、あるいはそう見たほうがいいかもしれない。

樊遲について

《左伝》哀公十一年に、冉有が季氏の左師をひきい、樊遲が右乗だったとある²¹⁾。冉有はこの時、季氏の家宰であった。

閔子騫について

仕えることを拒否した人として、すでにふれた。かれは、季氏からその私邑の費の宰となるようすすめられたのである。

[その他の場合]

以上において、魯および季氏につかえた弟子について概見した。しかし、《孔子世家》に“孔子弟子多仕於衛”といわれるように、その他の地に仕えたことも多かったらしい。しかし、記事として残されているのは必ずしも多くはない、それについてのべる。

子貢について

魯を去ってのち、衛の相となったという、ことは《弟子列伝》に見えている²²⁾。

子路について

魯を去ってのち、孔子から衛の蒲の大夫となるようすすめられたが辞退。のちに、衛大夫孔悝の邑宰となる²³⁾。

子羔について

子路が衛で難にあった時、衛大夫であった。《左伝》《弟子列伝》に見える。

子夏について

《弟子列伝》によると、魯を去ってのち、西河で教授し、魏文侯の師となった、とある²⁴⁾。

宰予について

《弟子列伝》によると、齊の臨菑の大夫であったが、田常との乱に親族を誅せられたとある。この記事が孔子の弟子のものとしてはあまりに似つかわしくないため、のちの竄入であろうとする説が多い。しかし、事実であるのかどうかということとは別に、司馬遷の時に宰予についてのこの種の話が世に広く行なわれていて、司馬遷はそれを伝に取り入れたものである、と思わざるをえない²⁵⁾。

有若について

哀公八年、呉の軍勢が魯に侵入した時、魯大夫微虎の私属徒七百人のなかに有若がはいっている。

以上のべてきたことをまとめると、孔子の弟子たちが仕えたのは、おもに魯においてであり、とりわけ季氏に仕えた場合が多いということ。またわずかな事例ではあるが、他国にも仕えており、それは、衛、齊、魏といった魯の近辺にかぎられている。この範囲が、ほぼ当時の儒家がもっていた勢力範囲なのであろう。孔子のいわゆる天下周遊のおり、従った弟子がそのさきざきで仕官するという場合があったかも知れない。しかし、それをはっきり示めず記事はない。かえって、《孔子

